

永 久 平 和

石原莞爾自筆

第135号
(平成28年1月25日)

目次

巻頭言……………	1
戦後71年を迎えての抱負 仲條拓躬	
◆【連載】	
蜷気楼の国・満洲国(その3) …… 坂本進一	4
● ダライ・ラマ法王を迎えて …… 田原豊道	2
● 石原莞爾の「戦後」を歩く⑤ ……	6
● 昭和天皇の御製⑩ 岩崎章次	
● 雑感 …… 山崎八九生	8
● 会員便り・SNS ……	9
● 編集後記 ……	12

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

戦後71年を迎えての抱負



当会会長 仲條拓躬

戦後71年の新たな年が始まりました。同志・会員の皆様におかれましては、様々な思いを胸に抱きつつ新しい年を迎えられた事と存じます。日頃の当会の運営に對しましてご理解とご協力を賜りましたこと、この場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

さて、昨年は戦後70年という節目の年でした。戦争を体験された方の多くが亡くなられた今、微力ながらもいかにして恒久平和を実現するかを模索してきた我が石原莞爾平和思想研究会の存在意義と役割が重要なものとなってくると確信いたしております。

日本にとつての戦争は1945年に終戦を迎えた大東亜戦争が最後ですが、その後の70年間、世界はさまざまな戦火につつまれてきました。そして東西冷戦が崩壊した1990年代を経て、9・11を契機とする21世紀になってからは、世界文明VSテロリストの世界戦争のような形となり、同時に戦争やその是非を巡る意識も大きく変化したのではないのでしょうか。この70年間で世界の人々の意識は少しずつですが確実にそして大きく変化してきています。

昨今発生したパリ同時テロ、コンサートホール、競技場、レストランなど8か所で大勢の市民が犠牲になりました。フランスのシリア領内空爆に対する報復だとISは犯行声明を出しています。

21世紀の時代、宗教の違いだけでは戦争にはなりませんでしたが、それが宗教戦争にまでなるのは、そこに理不尽な差別と貧困が加わる

からではないでしょうか。シリア紛争や欧州への難民問題、さらには世界レベルの貧富の格差などの問題に結びついています。

政府が言う対テロ、「国際社会と連携」とは、米英に日本の血税を拠出して空爆や軍事作戦を行うということでしょうか。日本の世論が政府の言う「テロに屈するな」に世論が同調することになれば、反対派の国民が騒いでも自衛隊派遣は堂々と日米同盟の下に中東に送られることになるでしょう。

現在大きな問題になっている、「集団的自衛権の行使容認」「TPP」「PKO」「戦後70年談話」これらは全て米国から指示されたレポート内容になっています。当然ながら日本の国益を前提にしているないので、国会などで質問をされても、安倍総理をはじめ誰もがまともに答えられないのです。また安保法制を巡る論議で、憲法学者から「憲法に違反している」と指摘されても、まともに論理を構築できないのです。

戦後70年間、先の大戦での多くの祖先の尊い犠牲の上に平和な生活があることを忘れてはいけません。広島、長崎を思うことは人の本質を真面目に考え、無辜なる被害市民に敬意を払いつつ、恒久平和のため勇気を奮い食い止めなければなりません。これからの日本が何をなすべきかを考えなければならぬと思うのです。

今の世の中、人間関係が希薄になってきていますが、どうぞ我々石原莞爾平和思想研究会の同志におかれましては希薄になることのないよう絆を強固なものとしていただければ幸いに存じますと共に、当会の流れが脈々たるものになりますことを希求してやみません。最後になりましたが、皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。戦後71年目の抱負といたします。

日本人は働きすぎと言われる。一昔と比べ労働時間は徐々に短くなっているものの、残業は当たり前で、「有給は退職時に消化するもの：」なんて会社は数多く存在します。私もそのような会社の社員です。家庭やプライベートを犠牲にしているのが現状です。

主な家庭ではマイホームを持つことに生きがいを感じる人も多いと思いますが、土地は高く、ローンを返却するために働きアリのようにつき、ひたすら返す：といった生活の繰り返しです。日本は戦後、米国の資本主義を健全だと思いい込み、発展させてきました。安倍首相が放った三本の矢は、うまく機能しているのでしょうか。

長年真面目に勤めた会社を無事定年退職した後、国の年金を受給しながら、元気なうちに趣味を楽しんだり、旅行にでも行きたいと考えるのはごく普通なことです。

ところが、政府は70歳定年を考えているようです。年金についても法律を「改正」しようとしています。でも、年金支給開始を5年伸ばせば、その5年間はどこから生活費を得るのでしょうか。高齢者は働きたくても働く場所がありません。過酷な労働で病気にでもなれば、一生働きアリのような人生で終わってしまうかもしれません。

キリスト教では、日曜日は安息日となつてお

り、仕事をしてはいけない日です。神がこの日をつくったとき、『7日目に休まれた。そして天と地と、草や動物、人間といった自分の作品をあらためて見直して、「これでよし」と満足した：』私たち人間も、休んで「自分を振り返る」時間が必要です。

ところが、日本人には休んではいけないという強迫観念があります。古い書物によると、昔は武士も農民も、特に決まった休日はなく、昔は武士も農民も、特に決まった休日はなかったようです。もともと武士の1日の労働時間は短く、せいぜい4時間か5時間。ただし農民は朝から晩まで農作業や雑役でずっと働いていたようです。

かつては大東亜戦争のときに賛美されたのが、「月月火水木金土」の精神です。1週間のうち1日の休みもなく訓練や仕事に励むことによつて、国も軍隊も強くなる。我を忘れて心不乱にとり組む、ということが一見美德とされていますが、自分の時間、自分の内面を見つめる時間がないということにもなります。

わが国では休暇を取りづらい風潮も根強いですが、ドイツの多くの会社では30日の年次有給休暇が定められていて、部下の休暇は上司がしっかりと管理をし、有給を100%消化しないと、なんと上司が罰せられるのだとか！社員が長期のバカンスをとることも珍しくないので、その間の業務が心配になるが、仕事は共有化してあるので、急用の場合は社員が共有ファイルを見ながら対応するんだそうです。

先日、伊藤忠商事が夜型の残業体質から朝型の勤務へと改める朝型勤務制度を導入したというニュースを見ました。夕方以降の残業を、朝にシフトするというものです。保育園に通う子どもがいるお父さんは、朝早く出勤し、夕方5時には仕事を終わらせ6時には保育園にお迎えに行きました。制度導入後、子供との時間が増えた嬉しそうに話していました。ちなみに社員の飲み会や会合は、夜10時までに終わるという約束になっているそうです。

充実した休みが仕事への集中力を生み、短い労働時間によつて生産性を上げます。プライベートの時間を大切にしながら、日々のワークライフバランスを振り返り、今後の働き方を考えてみたいと思います。

(仲條江)

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒179-0076 東京都練馬区土支田3-46-7

山崎行政書士事務所内

TEL(FAX兼用) 03-3925-2353(山崎)

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第135号 平成28年(2016年)1月25日発行